

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	続感情教育待望論（その12）：ことばは本来声であった
Author(s)	上原, 輝男
Citation	児童の言語生態研究, 18 : 2 - 15
Issue Date	2018-10-27
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046605
Right	
Relation	



続

感情教育 待望論

その12

ことばは本来声であった

元玉川大学教授 上原輝男

ただいま、過分なご紹介を受けまして、大変恐縮しております。上原でございます。

これまで、演題をどのようにしたらよいかというご相談を再々受けましたが、日頃私自身が考えている通りのことをお話ししたいと思ひまして、「ことばは 本来 声であった」という題を付けさせていただきました。

私は、「言語障害」とか「難聴」とかそういう面にかけては、専門家ではございませんので、その点、ご了承頂きたいと思ひます。にもかかわらず、図図しくやつてまいりましたのは、この会が、「こころと言葉を育てる親の会」と名乗っておつて下さることが、大変私をうれしくさせたことでございます。長年、私が考えておりました「言葉の問題は、それは心の問題なんだ。」ということと相通じるからでございます。

今日の、言葉の問題

今日における小学校、中学校の教育は、どうしても有名大学に直結するような、有名校に子どもを上げたい。それには学力をつけなくちゃならない。そういうことが教育である。と、こういう考え方が一般的であります。そのため、反面、非行問題その他が騒がれてきておるわけでありませうけれども、それはまた、起こるべくして起こっている現象だと言つても、決して過言ではないつていうふうな思ふわけであります。実はそれは、子ども達自身が引き起こさうと思つて起こしているんではなくて、大人がそういうふうな子どもをしむけているから、子どもはどこかで分裂していかねばならない。そういう破綻を来さなければならぬように仕組まれていってしまうということであろうと思ふんです。

子どもに責任があるのではなく、大人社会において、どこか欠陥があるからではない

かつていうふうに通うんです。それはやはり教育つていう問題を、技能的に考えようとして過ぎていからではないだろうかと思ふわけです。そして、その技能の最も基本的な問題として、「人間は、言葉を話す万物の霊長である」という、こういう思ひ上がつた考え方が、どつかであるんではないかと思ふわけです。しかし果たして、言葉というものはそういうもんだろうかというようなことを、私は早くから考えておりました。

移住者たちの悲しみ

三年前前に、南米・中南米・カナダをも含めまして、外務省の委託を受けてまして、「移住した日本人の移住者の日本語が、どのように世代交代とともに、現在話され、聞かれてるか」そういう調査を一ヶ月間してまいりました。ところが私は、帰ったら土産話に、

ば、言葉は人間の技能の一つとして、使いさえすればいいんだというふうを考え始めやすい。最も合理的な言葉をお話しようというふうを考える。相手によく分かるように話しさえすれば、それでいいんだというふうに思ったりしがちである。そして、正しく話しさえすれば、それでいいんだというふうに考えるようになる。いつの間にか、NHKの日本語が最も日本でいい言葉なんだというふうに、どっかで錯覚し始める。民放の人達は、あ、やっぱりあのアナウンサーだから、ああいうしゃべり方をするということが感じ取られて、非常に身近に思える。ところが、NHKのアナウンサーのほうは、言語明晰であるけれども親しみが湧かない。何か、お役人がしゃべっているような感じがすると。

親の願いと教育

先程もどなたか仰っていましたけれども、人間というものは、神様に近づくこともできるけれども、悪魔になってしまうこともできる、そういうのが人間であります。

私共の本当に理想とするところは、神様のお手伝いをしていらないかかっていうふうにお手伝いをしてあります。決して、生意気なことをやってはならない。人間の知恵に頼りすぎたようなことをやったら、必ず子どもを

無理な方向へ引きずってしまおう。こんなふうにお手伝いしてあります。昔から親達はみんな、子どもに十分な教育をつけてやりたいうと、こう思ってきたに違いありません。それが、親心であろうと思うわけがあります。しかし、間違っているのは、今日親が子に対して教育をつけてやろうと思うのは、それは、「学力」であります。これが「教育」だと思っております。この辺が、もうすでに狂い始めた証拠ではないかというふうに思っています。

今は、学校を出すことが、何か親がしてやらなければならぬような考え方になってきております。学校教育は、百年の歴史をもっておりません。しかし、この百年は、全てが成功しているとはいえないのであります。これは、間違っていないんです。学校教育が、人間に果たしてきた成果というのは、全部が全部、正しかったとは言えないのであります。私は、「功罪相半ばする」くらいに思っております。何か、その一番大きな点には、「教育は、学校が担当するんだ」というふうには、日本国民に思わせた点であります。これが、まず私は、まずかった点ではないかかって思うんです。やはり我々が、人間が人間の子において、親達が子において励まされなければならぬ教育の問題は、やっぱり「心」だったということでありまして、「心を育てること」

だということでありまして。学力をつけることによつて、その人間がだめになるような学問だつたら、しない方がましなんです。進学校受験準備をすることによつて、人間が狂っていくんだつたら、それは、やめた方がほうがいいんです。最近、新聞紙上で出ているのは、みんなそれらの欠陥が出ているといつていいじゃありませんか。実際、その当事者達にしてみれば、自分達の教育が間違っていたとはつきり言っているではありませんか。そして一番大事なのは、「何ができなくともいい、心の素直な子どもであつてくれれば。」というのが、親の願いだったのではないのでしょうか。私の友人、竹馬の友ですが、これも大学の先生をしています。「私の母の言葉」っていう作文を書いてくれました。私は、そういうものを集めているんですけど、私も、私の友人の言葉が一番強烈なんです。その母は、「人と競争するような恥ずかしいこと醜いこと、それだけはしないでくれ。」つて言つて、その子を育てたそうであります。本人は、今はもう大学の先生になっておりますから、「おふくろが、そういうふうには俺を育てたから、俺はこれくらいにしかなれんかった。もう少し競争しろと言つていたら、俺ももう少し偉くなつていたかもな。」なんて言つて、冗談言つておりますけれども、やはりその母の教えの素晴らしさが、今

になつてしみじみ分かるという歳になつたわけでありませう。ところが今日は、「人を押しつける」でも、お前は立派になれ。」というようなことを、ともすれば、やりがちであるということでもあります。「心豊かな人間に育てあげる」ということが、どれ程、大事なことか、分かつてくることではないか、分かつていうふうに思うわけですね。

「うみ」という言葉

今日は、特に言葉の問題でお招き頂いたわけがあります。先日、角川書店の『古語大辞典』という古い言葉を集めました大辞典が出版されて、その紹介が新聞に出ておりました。この『古語大辞典』を紹介するなかに、他の辞典と違うことが出ておりました。例えば、「海(うみ)」の項には、この「う」は、「うのはら」「うしお」の「う」と同じである。この「う」は海洋を表す語基である。こういう辞典は確かに初めてであります。「み」は「水」を表す語基である。このように、一部分が紹介されておりました。私に今、何故この新聞記事を持ち出したかと申しますと、学者達が、言語学的に文字の一字一字について、その音の一拍一拍について、それが何を表すかというのを、早くから明らか

にしたいと思つておられることでもあります。「海」という言葉をとつてみても、この「う」という音は、海洋を表す語基であり、「み」は水を表す語基であるというようなことが、やつと辞書に書き表されるようになってきたわけでもあります。「語基」という、この学術用語も大変まだ不確かなものではあるんですが、何か基本的なものの程度にうけとめられて下さつて結構だと思つています。

けれども、我々は、知らず知らずのうちには、「う」の音に海を感じ取り、「み」の音に水を感じ取つてきたというほうが正しいんであります。つまり、人間の音声は、出る音それぞれに自分の感じ方をまとめていつたわけでありませう。日本人の感覚配当を、我々の音声に配分していつたと言つてもいいわけでありませう。分かりやすく言うならば、これが「基」であります。

私は、こういうことを専門にしている学者でもありませんので、この辺で、遠慮しておきますけれども、私自身が、はつと思つたことがあります。それは、日本人がもつてゐる「うみ」という音でもつて「海」を感じてゐる。この一番基本的な感じ方自体に関してであります。それは、戦争の話になりますけれども、終戦後『戦没学生の手記』というのが出たことがあります。戦争に学徒動員されていつて、その学生達が、最期に書き残して

た遺書を集めて出版され、それに『きけわたつみのこえ』という書名が付けられました。「わたつみ」というのは、辞書でひきますと、「わたのような海」といつていうふうには、現代語訳されるのが普通であります。

ところが、植物における「綿」、これをも「わた」と言いますが、私の感じ方では、『きけわたつみのこえ』の「わた」は、これは、決して「あのおふわふわした柔らかいふんのような海」なんていつていうことでは絶対ありえないといふふうには、思つたわけでありませう。だとすると、その「わた」は何だろるか。それは、「はらわた」の「わた」だと言へばいいんだつて思つた時があります。海が黒黒と、「はらわた」のように見える時があります。あの力強さがなければ、「わたうみのこえ」「きけ、わたつみのこえ」なんていつてみても、戦没学生の遺書は浮かばれないといふふうには、直感的に思つたことがあります。そんなことを、私はぼつぼつ考えるようになりまして、さらに、発見したことがあります。

「そつだつた、日本人の『うみ』は、これだつた。」つて思つたのがありました。何故、あの「化膿」を、我々は「うみが出る」といつような言い方をするんだらうかといふこととあります。

明治の小学校教育の第一の目標は、「文盲

を無くそう」としたところにあつたわけ
です。文字が読めない人を無くそうという、近
代国家に早くなつていかなきゃならない
いうんで、日本人の家庭の子ども達を学校に
預け、早く文字を教え込もうとした。そのた
めに、我々の頭の中では、元来日本人は、あ
の大海原の「海」をみることに、自分ででき
た「おでき」の「膿み」をみることは、同
じ感覚で見えたのですよ、文字教育が災い
をしてしまったために、「さんずいの海（う
み）」と「にくづきの『膿み』（うみ）」と、
「こちらはこちら」なんていうふうに、ちっ
ともつながりをもたなくなつてしまつたん
ではないかなというふうに思うわけです。これ
も知的教育を受けすぎた欠陥だということな
んであります。

また、さらに私は、日本人の「うみ」と
いうのは、「産み」と同じ考え方でよかつた
んではないだろうかというふうに、思つた
わけであります。「ものが、産み生（な）さ
る」内側から内部的な生命が外へ吹き出し
てくる。それが、「うみ」であります。だか
ら、同じようにおできが中から吹き出して
くる。それを「膿み（うみ）」といい、あの一
面、静かなように思える海原も、何か、内部
の生命を感じ取るということにおいて、「う
み」という言葉を産みなしているんではない
かと思うわけであります。

さらに、もっと最近になつてから、「この
話は、まだ続く」と考えた点があります。そ
れは、何故人が息絶ええると、地中に葬るこ
とをもつて、「うみ」と言うんだらうかとい
うことであります。土中に埋めることを、何故
「うずむ、うずめる、うめてしまふ」と言
うでしょう。「うめる」という言葉が、何故
こんな所にくつつくんだらうかと思つたわけ
であります。それは、遺体を「うみ返す」こ
とにあるわけであります。人間がこの地上か
ら産まれて、そして地下に帰り、そして、よ
り大きな生命力に包まれて、もう一度また復
活してくるという考え方を、日本人が基本
にもつていなければ、こういう言葉はうま
れなかつたであらうというふうに考えられるこ
とであります。

円いもの・結んだもの

漢字というのは非常に便利なものなんです
が、漢字があつて、それに音を付与したわけ
ではありません。我々が、もともとの「音」
をもつていまして、それを中国の文字を借り
て、それに当て込んでいったわけでありま
す。「漢字は全て当て字だ」と考えるほうが

正しいんであります。日本人にしてみれば、
日本人のその感覚音に、中国の知的文字を
あてがつていったわけであります。例えば、

「やまとだましひ」って言います。「やまとだ
ましひ」の一番下の「ひ」は、或いは「み」
であるかもわからない。寝間着の紐が結ばれ
たりします。偶然に、「たまつころ」が出来
たりします。そうすると、少なくとも、私が
知っている上方方面では、大変に喜びます。
「あつ、お金が入るよ、きつと。」っていう
ふうに、「たまつころ」ができることをもつ
て、自然に寝間着の紐が結ばれていく。「結
ばれる」ことを「縁起良し」とするわけであ
ります。出雲のお社は、縁結びの神様であ
りますが、これは、日本人が「結ぶ」とい
うことに、特別な感じを委ねるわけでありま
す。「万葉集」の防人の歌なんかにも「あな
たの下紐を私が結んであげたんだ。この玉結
びを、絶対に他の女性にほどかしてはいかん
よ。」というような歌があります。「切れた時
には、自分の手で、この私がつけておきます
針で、またつないで下さい。」というような
歌もあります。このように、「たま」「結ぶ」
ということに、特別な感覚を日本人は持つて
いるのです。

円い円を描きますと、日本人は、大変喜ぶ
わけです。好きなんです。この円いものを
みると、我々の感覚は中心を考えている。こ
れは学校で、数学、幾何を習つたから、円と
中心なんて考えてくるようになったわけでは
なくて、我々自体の感覚がそうなっているわ

けです。「鉄砲の弾」なんていうのもですね、それは丸い物である。そして、それは「たま」は「命」であるというふうに考えているからであります。

日本人は、こういう円いもの、それを表す結んだもの、そして実をつくったもの、こういうものを大事にする感覚をもっておりません。

握手ってというのは、これも「手を結ぶ」であります、一人で手を結ぶことが日本人はできるわけです。そして、この教育は、学校教育以前において、もう行っていたわけがあります。「むすんで ひらいて」って、早くから、日本人のこうした感覚教育を、実はやっているんです。無意識でさせていくわけがあります。結んでいるわけです。これが「結び」なんです。「にぎにぎ」なんです。「おにぎり」なんです。「おにぎり」は、同時に「おむすび」であります。たまの状態を作ったのが、「おむすび」なんです。その「たま」を口の中に入れるから、生命感が湧いてくるというのが民俗学でいう考え方です。あります。お正月のおもちを食べるのは、丸い物「魂(たましい)」を食べているわけがあります。お宮に参って、手を洗う。あれはただ裸をして、穢れをとっている、きれいにしているだけではありません。あれは、手を結んでいるんです。「水を結ぶ」って言うので

しょ。水をこういう形で汲み上げる。これを「結ぶ」という。このような状態にするのが、実は「結ぶ」なんです。もうこれが円い物をこの中へ入れたっていうことなんです。これが、「結び」であります。

音と感覚は一つである

こんなことを考えてきますと、日本人が使っている「音」は、日本人の感覚それぞれに、基本的なものが用意されているということとを、考えざるを得ないわけなのであります。

我々が、大事にしなければいけないのは、ことばの、その音と感覚とは一つだということに考えていかなければなりませんということです。我々は、言葉にあまり振り回されてはいけませんということを申し上げます。何故か。「日本人の言葉観は、実は『ことば』観なんだ」からです。へんな言葉です。文字に書きまますと、ことばの「は」は、「こと」ではありませんで、「葉っぱ」なんです。葉っぱ以上の役割を果たしていないっていうことなんです。日本人は、この「こと」のほうを大事にしているんです。本体は、「こと」にあつて、そのことをつかまえないものとして葉っぱがある、ということなんです。葉っぱってというのは、木があつ

て、枝が伸びて、その先につけているのが葉っぱなんです。この感覚でもって、日本人は、「言葉」というものをもっているわけです。「は」という音は、一番先に出ているところなんです。一番早く、目に付くところが「は」というんです。この口の「歯(は)」とそれから、木の「葉(は)」っぱと何も関係がないなんていうふうに、文字教育を通してしまったために分からなくなっていただけなんです。日本人の感覚からいくと、「物の先端」は、全部「は」であつたわけです。『枕草子』の「山の端、少しあかりて」という山の端も、「は」なんです。どういうのか、ハ行音は大体そういうものをもっているようであります。(ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ)というのは、どうも「うわべのもの」「中身が外に現れたもの」というような感覚をもっているのではないかというような気がするんです。

一つ、大きな証明をしてみます。人間が笑います。皆さん、笑ってみて下さい。ハ行音で笑ってみて下さい。そんなこと言われなくて、人間は皆、ハ行音で笑うんですよ。「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」で笑うんですね。「ハハ ヒヒヒ フフフ ヘヘヘ ホホホ」。これで笑うわけです。「これ以外で笑ってみる。」と言うと、「アアア カカカ クケケ」というのはあるかもしれませんが、他にも、他ではちょっと無理でしょう。「ラ行

音で笑え。」なんて、これ笑えませんよ。「ラ
ララ リリリ ルルル レレレ」なんて。こ
れでは笑えない。

皆さん、お宮に参りますと、必ず狛犬さん
がいますね。あるいは、仁王さんがいらっ
しゃいますね。あの狛犬は、昔から言われ
ておりますように、**ッ**あ、**うん** という字は
「阿吽」を表している。片一方は口を開いて
いる。片一方は口を閉じている。この形を
とっているって、よく言いますね。一方は、
ッア という発声をし、片一方は **ッ**ウン と
言っている。これで「人生」を表す。**ッ**ア
で産まれて、**ッ**ウン で死んでいく。こうい
う凄惨な知恵をかつての日本人はもっていたん
です。**ッ**ア で産まれる。**ッ**オギャー で産ま
れるわけでありませぬ。**ッ**ギャーア で産ま
れるわけです。というの、人間の体が
出てくる時には、**ッ**ギャー という声で出
てくるような仕組みをもっているわけです。
そして、あの世へ逝く時には、「ウン」こう
なっているわけなんです。

体操の先生は、「深呼吸をしましょう。手
を大きく挙げて下さい。うんと吸いませよ
う。サアと吐きませよ」なんて言って、手
と一緒に使わせる。これに呼吸を合わせる
と、「吸って吐いて」っていう形になるわけ
ですね。だから、言葉は、我々の身体の吸つ
たり吐いたり、この呼吸を使っている運動な

んです。その時に声帯が伴うことによつて、
音が変わってくるわけですね。それに、我々
の感覚が配当されていくわけです。

一音一音に感覚を配当してみる

さあ、そういうふうになると、一音
一音の感覚配当っていうのを知りたいとお
思になるだろうと思うんです。少なくとも、
も、はっきり分かることは、「ハヒフヘホ」
で笑っています。ということをやったわけ
です。じゃ、他はどうなっているんだろうか
と。驚きの声っていうのは、これ
は変えてみようっていうわけにはいきませ
んね。「あつと驚いた。」っていうのを、他
の「ラツて驚いた。」なんて、こうはいきま
すか？いかないでしょ。「えつて驚いた。」つ
ていうのをですよ。「ルツて驚いた。」こう
は、いかないんですよ。「言え。」って言つて
みたつて、言えないんです。だから、「こと
ばは、本来、声であつた。」って言うんです
よ。「我々の肉体が出す音を言葉だつて考え
る必要があるんだ。」っていうことなんです。
特に、今日のような障害児をもつておられる
おとうさん、おかあさん達に考えてほしいの
は、自然の音を出させるっていうことを考え
てほしいということなんです。その子ども達
が持っている体の、肉体の音を出させる。そ

こから、やる必要があるんではないか
って、素人は考えるということでありませぬ。

次に、ア行で驚きをとつてみたいと思
います。「ア」「エ」「オ」これを基本にして
いるように、私は思えてなりません。ア段は、
「ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ」
これは、驚きの音に変わりやすいわけです。
例えば、タ行のア段、「タ」ですね。これは、
結構いけるんです。あんまり、やりませんけ
れども、「タアア」っていうのは、こりやい
けるわけですよ。あるいは、「マ・ミ・ム・
メ・モ」その一番上の音、これは、「マ」で
しょ。これなんか、充分ですよ。 「マアア」
なんて、やつてるわけですよ。ヤ行もその通
りですね。「ヤアア」なんてやつてるわけ
です。

ところが、そうはいかないのがあるん
ですよ。ア段で、「サア」なんていうのはどうも。
「サアア」なんて言つて、驚けないつていう
ことなんです。それから、「ナ」が駄目
ですね。「ナアア」なんていうのは、こりやあ
ちよつと無理だつていう気がするんです。何
故そういうことが起こるんだろうかつていう
ようなことも考えてみると、持ち役があるつ
ていうか、音の配当が、やつぱりあるよう
な気がするんです。一番活動していないのは、
ラ行音です。「ラ・リ・ル・レ・ロ」なん
です。ラ行音で始まる言葉は、日本語の中には

して、自分の感覚をどんなふうに分離していくか、こういうことを、子ども達は最初、一生懸命になってやっていているんだと思うんです。

日本語は、「擬声・擬態語」が世界で一番多い、もう抜群に多い言葉なんです。「擬声・擬態語」。私は、擬声とか擬態という言葉の方は、ちょっと抵抗があるんですけども、音を頼りにして創り上げた言葉ということも、日本語の一番基礎に据えているって、どうも考えているんです。日本人は、如何に感覚的であるかっていうことなんです。ところが、五十音、その「アラアラ」っていうのと「カラカラ」っていうのとの違いは、もう本当に子音の違いではないわけですよ。「頭がくらくらした。」「あつ、きらきらお日様、光ってる。」の、「キラキラ・カラカラ、クルクル、クラクラ」なんていうのは、ほんとにわずかな違いですよ。それでも我々は、パツパツと我々の感覚を反応させていかなくちやならないっていうことです。南米で話をした時に、質問する人がいました。「先生、『やっぱり』って言う人と『やはり』って言う人がいますか、それは、どちらが日本語として正しいんでしょうか」と質問をなさったんですね。ここが日本語の特徴だというのは、やはりと、やっぱりの言葉を一つの言葉として扱いて、いわゆる単語

だっというふうにおもうって意識が、もう出てきているわけです。ところが、単語だっというふうに思っているから、やはりと、やっぱりととは違うっていうふうに考えてしまうわけです。これは、発音の癖で、やはりが、やっぱり、こちらが詰まったわけですね。促音の形をとったから、やっぱりになって、次の「は」が「ぱ」に変わっているということなんです。音が変化しただけのことですよ。これは、大体、こんな漢字（矢張り）を当てたりするもんだから、れっきとした語だっというふうにおもうっていません。ところが、そうじゃありませんで、これも、やっぱり我々の音感覚だけが作り出した言葉なんです。他の言葉を並べてみると分かる。これは入れ替え可能である。やっぱり、さっぱり、きっぱり。他のさっぱり、だとか、きっぱり、だとかは、擬声・擬態語だと思っている。ところが、やっぱり、だけは、ちゃんとした言葉だなんて思っているから、区別しようとする。そうじゃないんですね。これの違いですよ。やっぱりって、「や」と言うか「き」と言うか、その違いで我々はパツパツと反応できるんですから。我々が言語能力があるということとは、やっぱり、我々もこうした感覚の音と感覚との接触あるいは分離を考えてやらなくちやならないんだっというふうなこ

とになっていくだろうと思います。

「さ」と「き」と「くら」

私は、小学生から剣道をやりました。剣道であんまり負けことがない。本当はなかつたんですけども、一度負けたんです。それは、名前負けしたんですね、相手の名前に。それは、呼び出しの時です。私は、鳳鳴中学だった。「鳳鳴（ほうめい）」っていうのは、音がこう、強い音が一つもないですよ。「鳳鳴（ほうめい）中学、上原君」って言うわけですよ。「上原（うえはら）」って言うのは、また強い音が一つもないわけです。「鳳鳴中学、上原君」優しい選手が出てくるって感じがするでしょ。ところが、相手は違ってたんです。向こうは、「豊岡（とよおか）中学」って言うんですね、「豊岡（とよおか）」って、「か」という音が入っているでしょ。「豊岡中学」。名前が、何と「さっさ君」って言うんですよ（笑）。私が見た途端、その音を聞いた途端に「駄目だ、こりゃ勝てない。」と思いました。さっさと負けましたけどもね（笑）。さっさというふうな名字があるんですね。また、このサ行音っていうのは、面白いんです。日本人は、サ行音に神秘感を感じる癖をもっているんです。「サ」っていうのは、「ササ」って言うでしょ。「ささのは さ

らさら」っていう歌があるじゃないですか。「ささのほ ささらさら。」っていう歌を子ども達に歌わせることによって、「サ」の感覚を植え付けているんです、ちゃんと。「ささ」っていうのは、あの『ささの葉』が、サッサツサツサツ、というふうに通く音を、日本人は、「笹」と知っているんです。そして、「ささ」っていうのは、神が忍び寄ってくる音だとしているんです。

お酒のことを「ささ」っていうでしょ。御神酒をあがらない神様はありませんね。また、お酒を使わない神様ごとってありませんよね。あれは、証明するわけですよ。アルコールを入れることによって、アルコールだとは知りませんから酔ってくるわけです。そうすると、『神の気がのりうつつた』と考えるわけです。だから、神様ごとをしているんですから、アルコールを入れないわけはない。そして、「けがのりうつつた。」「神のけがのりうつつた。」「神の気(け)」。これは大事にしなくちゃいけませんよ。「気」を大切にしなくちゃいけない。人間は、全てそうなんですけれども、今、ヨガだとか何かやっています。あれはやっぱ「気」をもとにしているわけですね。何かを感じるようなのが、人間なんです。そして、それを一番感じているところは、これ(毛)です。だから、これに「け」という音を与えているわけですよ。

ね。同時に何か自然界を見て、気を感じるもの、それが「木」なんです。「気」を見せるわけです。あの植物が、気を見せてくれるわけです。何をみせてくれるか、天の気をみせてくれるわけです。日本人はこれに敏感ですから、日常挨拶語にこれを使っているわけです。「お元氣ですか。」って言っているのは、これです。「お元氣ですか。一番元になる気は、大丈夫か。」っていうことを言い合っているわけです。どこの時代から始めたのか知りませんが、「お元氣ですか。」っていうのを、中国人はこんな挨拶、もうしてないんです。最初は、中国の知恵だと思っただけなんです。最初も、それを日本人が輸入して、これは素晴らしいと思っただけから、未だに離さないわけです。中国では「あなたに天の気がどんなふうに入っていますか、それは、しっかりしていますか。」っていうことを尋ねていたんです。

今、漢字を書きました。上から読んでいただきます。一番最後に、どんな音が残っていますか。「柳(ヤナギ)」「柿(カキ)」「杉(スギ)」「檜(ヒノキ)」「榎(マキ)」これは、木偏がついているだけではありません。日本人がこれを見て感じたのは、気を感じているから「杉(すぎ)」と言い「檜(ヒノキ)」と言っているということなんです。我々はこん

な漢字を使いながら、指摘されないと気がつかない。我々が木に感じようとしたのは、その本当に気を感じようとするためであったっていうことが証明できるでしょ。「桜は、木って言わないじゃないか、松も言わないじゃないか」って仰るかもしれませんが、でもそれは、「き」ではないんです。「桜(さくら)」は木偏で書きますけども、昔は「二貝の女が木にかかる」って書いたんですね。昔の人は、ちゃんとうまい具合に教えてくれた。今は、どうですか?「普通の女が気にかかる。」なんて。ちよつとわけがわからん、これは。漢字は木偏ですけれども、日本人は、これを「き」と言わなかった。「桜(さくら)」は神木なんです。「神様」特別のものなんです。だから他のとは一緒にしないでくださいね。また、先程の「サ」っていう音が入っているでしょ、そして、その下に「くら」っていうのが入っている。これで分かるんです。「そうか」って思いつく人いませんか?だから、桜の下に行って日本人は宴会するんです。「花見」なんてやっているんです。あれは、元が分からなくなったから、花を見に行っていると思っただけですが、そうではなくて、「桜の木に集まっていた。」というのは、そこに神様が降りてくると思うから、ご馳走をもって、お供えに行っただけです。その元が分からなくなってしまうと、「花見

「酒」なんていうようなことになって、同じことをやっているでしょ。花見の下で宴会と同じ形をとるでしょ、ご馳走作って行って、酔いがまわってくると、「誰か歌え、踊れ。」なんていうようなことになっちゃう。それは、「神様がお出でになっているから、お客様がみえているから、さあ、誰か一つ余興に何かやりなさい。」っていうのと同じ形をとっている。

また、馬の上に載つける「鞍(くら)」。どうして、あの土蔵の「蔵(くら)」と一緒になのかっていうことになるわけです。くらは、一番大事なものをしまっておくところでしょ。また、「座(くら)」なんていうのは、お座りになる場所ですね。今でも、国会議事堂にいきますと、菊の御紋章のついた椅子がありますよね。今の記者達は、何も知らないもんだから、「天皇の椅子」と言うようになってたんですけども、昔の人達はちゃんと今でも「高見座」って言いますよね。「たかみくら」ですよ。貴きものが位置する場所を「くら」と言うんです。そこは貴き人がいらっしゃる場所である。こういうのが日本人の感覚なんです。だから、「桜」っていうのは、今言っていることが、お分かりになっていただけるだろうと思うんです。

日本人の言語っていうのは、何としても、感覚を音にしたものである。日本人の感覚を

音に変えたら、それが言葉になっているんだという考え方もたなければならぬ。少なくとも、我々の心象として、心の象徴ですね、心の象徴が、心のシンボル、感覚をシンボリックしたもの、それが言葉だということふうに、また心象の音声化であるというふうに着眼すれば、絶対間違ってくるっていうふうに思っているということなんです。決して、物理音の模写ではないんだということなんです。子どもに言葉を教える時に、物理音の模写である、あるいは、暗記にだけ頼っていくような、言葉を暗記させるような方法をとっては、子どもは苦しむ一方だということであります。まだ知恵が発達しかねているわけですから、自然な感覚の伸びに沿って、その心の音声を、心の表れを音として固定していく方法をとらなければならぬだろうということ私を私は言いたいと思います。

三歳児の感覚と言葉

時間がすぎたんですけれども、こんな例があったっていうことを、もうちょっと申し上げたいと思います。私が、英才教育研究所に三年くらい行ったことがあります。一歳九ヶ月の子どもくらいから手がけたんですが、その時に、「つかつか」っていうのと、「すたすた」っていう区別がつかつかつかないかってい

う実験でいいデータが得られたんです。

こういう実験をしました。こう足型を描いたんですが、矢印を書いて、棒を引っ張って、足跡をこう描いた。もう一つの図面は、これの逆を描いた。線から離れる形の矢印を描いて、足型をまた違えたんです。それで、「つかつか」と「すたすた」とを区別して、「おじさんが『つかつか』って言ったなら、どっちの紙を取ればいいか、『すたすた』って言ったなら、どっちを取ればいいか、取りなさい。」って言ったんです。三歳児でしたよ、これ、ほとんどの子が間違いませんでした。「つかつか」っていうのは、対象に寄っていく音だっていうのを聞き分け、「すたすた」っていうのは、対象から離れていく音であるっていうのを区別しているっていうことであります。どうです。私は、言葉を覚えさせようなんていうふうにはしないで、言葉をどんなふうに分離しているのかっていうことを調べることを、当面の仕事としてやっていたわけです。また、その当時、分かったことですが、子どもをドアのそばに連れていきまして、ノックの真似をさせました。そして、「トントンってノックして頂戴。」って言ったから、三歳の子どもでも、トントンってノックをしてくれました。今度は、「パンパンってノックして頂戴。」って言ったから、一瞬迷いましたが、感心しましたよ。パンパンってい

う時には、ちゃんと手を広げて、こう叩きま
す。どうです。トントンっていう時には、手
が丸まる。このほうがトントんに近い。パン
パンって広げた時には、平板にものがあった
音であるということ、ちゃんと区別でき
ているっていうことであります。そうして、
「ト」っていう音と「パ」っていう音との区別、
そういうものを見極めているっていうことで
あります。

お伽噺の大切さ

それから、日本の童話なんか、なるだけ古
い童話を使って頂きたいと思えます。よく
今、子どものお伽噺とか童話なんていうのを
作るサークルができて、皆さん楽しんで書い
ておられる。楽しみは結構ですけれども、そ
れは、専門家に尋ねられてからにして頂きた
いと思うんです。あるいは、この童話を聞か
ずということ、どういう役割を果たすこと
になっているのかっていうことをよく勉強な
さってからにして頂きたいというふうにし
て頂きます。

昔のお伽噺は、良くできているんですね。
長年長年培ってきた、そして生き残ったもの
が残っているんです。私が一番素晴らしいと
思うのは、『おむすびころりん』だと思っ
ますが、あの中には、ちゃんと擬声・擬態語

が用意されているっていうことですね。まず
おむすびが、ころころころころ、ころがっ
ていききました。おじいさんは、どんどんど
ん、追っかけていききました。これの繰り返
しばかりです。ところが、この繰り返して
いうのが、子ども達が一番楽しいんですか
ら。子どもを笑わすなんてわけないんです。
繰り返してやればいい。子どもの前にいっ
て、手をこうやって、これを何回か繰り返
す。笑うまでやっておりゃいいんです。必ず
笑いますから。一番簡単なのは、「いないい
ないばあ」でしょ。私は、「いないいないば
あ」なんていうのは、あれはやつぱり、一番
大事な教育だと思うんです。日本人は、太古
から「いないいないばあ」をやったんでは
ないかと思えますよ。「ばあ」っていうのは、
隠れていたものを現すことなんです。「ば
あー」っていう、この出るっていう、出現す
るっていうのを、「ばあー」っていう音を合
わせる、それをやってくるわけです。だから、
これは、もう必ず喜びますよね。一回で笑わ
なかつたら、二度、三度やればいいんです。

まると三角とバツ

それから、視覚的なものも気をつけてほし
いと思うんです。視覚的なもの。先程、言
いましたね。「まると」をみたら、日本人はその

中心が見えてくる。これも育っているわけ
です。三角は、日本人はあまり意識しないん
ですね。ところが、日本人が意識しているな
と思えるもの、それは×(ばつ)。これは、
すごく日本人の感覚にはきつく入ってくるん
ですね。なんで学校の先生っていうのは、答
えが間違ったら、これを付けるんですかね。
合っている時には、○でしょ。違っているも
のには、×でしょ。何で、こういうのをやっ
てきたんですか。それは、これを×(ばつ)
というから、やっているんです。日本人は、
×に対して、特別な感覚をもっているって
いうことを知っているから、これを与える。し
かしこれは、決していけないっていうこと
ではなく、普通に使うてはならないということ
なんです。この印は、日常生活において、使
てはならないということなんです。そういうこ
とからいくと、○よりも恐ろしい印なんで
す、それがよく分かるのは、去年だったか封
切られた「二百三高地」っていう映画、ご覧
になりましたか? 「二百三高地」に向かっ
ていく兵隊達っていうのは、何をやっていま
した? 白だすき隊という決死隊っていうの
は、全員襷をかけるわけです。今日は、お若
い方が多いんですけども、戦争なんていっ
たって、ついこの間のことですよ、その時
に、みんな出て行く兵隊さん達は、襷をかけ
させられたんです。なんで、襷をかけたの

か？　なんで日本人は、あの襷がけで仕事を
するか？　これは、神様がいらっしやるから
やっているんです。これをやることによって、
神に近づくっていう印なんです。だから、
決死隊がこれをやるっていうのは、「命
救われますように」っていうことじゃなくて、
「もはや神に近づく。」っていうことなんです。

私は、奈良の春日神社の宮司さんに、あそ
この若宮のお祭りを見せていただいた。その
若宮様の魂をお祭りの時に出されるわけ
です。その時神主さんがちゃんと白襷をして
おられるんで、しめた、と思ったんです。そ
こそ、まさしく占めた！と思いました。私の
いうことは絶対正しいっていうことを、見せ
てもらえたと思っただけです。それは、神様を
抱かれるんですね。そのために、白襷にし
て、そして、神様をこうやって抱いていらっ
しやるんです。奥さん方は今はあまり「襷が
け」ってしませんけれども、あれは神様に近
づくっていうことで、これは恐ろしいって
いうことです。だから、日本人は間違ってい
たら、これをやったっていうことなんです。
「ばつ（×）」っていうのは、つまり、「ばち
があたる」っていうことです。

これが、どんどん体から出て行くと、駄目にな
っちゃう。それに、「血（ち）」っていう
「音」を与えている。これは、「ばつ」ある
は「ばち」「ち」なんです。もつと恐ろし
いものにもありますよ。日本女性が一番嫌
なもの、「へび」。あれがもつと恐ろしくな
ってきたら、「おろち」っていうんです。雷様。
あれを「雷（いかずち）」なんて言った。ま
た、これを「交叉する」っていうふうにと
っている。違えた所なんです。「間違えた」
っていうのは、「違えた」ところなんです。「違
えた（血替えた）」「血を交換した」ところで
あるっていうことなんです。「血を交換した」
「契りを結ぶ」っていうのは、これなんです。
「間違う」っていうのは、「血、かう」なん
です。「血を替えた。」んです。交換したもの
を、町に出て、お金を出して、「買う」「買
物をする」っていうのは、「かえる」んです。
「かう」んです。だから、「交叉する」って
いうのに、日本人は非常に敏感なんです。「入
れ違う・食い違う・行き違う・飛び違う・す
れ違う・取り違う・吐き違う」っていう。日
本人は、非常にこの「違う」っていう言葉を
発達させてきているっていうことなんです
ね。「互い違い」なんて言うでしょ。「互い違
い（たがいちがいがい）」って何ですか？　あの
「たがいちがいがい」の「た」は、「手」なん
です。「手を交換する」っていうことなんです。

「向こう」と「こっち」、「たがいちがいがい」
にする。「手を交じわう」ことによって、この
「ち」を交換する。「威力」を交換するって
いうことなんです。「甲斐の山々」なんて
歌がありますよ。武田信玄の甲斐。「甲斐」
っていうのは、あの「かい」ですよ。「海の中
の貝」ですよ。「貝」というのは、交叉する
から「貝」なんです。じゃあ、あの山国が、
どうして「甲斐（かい）」なのか。今度こ
ちへ来る時に、飛行機で飛んできました。そ
したら、山々が、あのおねりがこう、違っ
ているんです、山脈が。そういうところを「甲
斐（かい）」というわけです。

おわりに

大変時間を超過してまでお話しさせて頂
きましたが、この「かう」っていう言葉を最後
に取り出しましたのも、日本語が一番大事に
している点、日本人が感覚をそれぞれなりに
育てていて、今、自分の感覚はここまで来
ている、相手はどこまで来ているかってい
ようなことを確かめ合った時に、日本人は言
葉で会話してたんではないかっていうよう
に思えてなりません。日本人は敏感であつた
から、それを「出合い」っていうふうに思
えたんではないか、今日も御縁があつて、皆
さんとういう話をさせて頂く機会を持てたわ

けですけれども、これも、日本人のもつている言語感覚的などころまでおりてきました時に、初めて、今日の出会ひも、素晴らしい出会ひだったのではないだろうか、また、上原輝男がもっている感覚というようなものが、皆さんのもつていらつしやる感覚と交叉し始めた時に、「今日の話はいい話であったとか、つまらなかつた。」というふうに仰るんではないかと思うんです。

最後に繰り返しになりますが、我々日本人は、「感覚」を「音」に変えたら、それが言葉になつてゐる、という考えを持たなければなりません。また「言葉」は「感覚」をシンボリックしたものであり、「心象を音声化したもの」という考えを持たなければ、言葉の習得において、子どもたちはますます苦しむことになるかと思つてあります。

昭和57年7月20日

青森県弘前地区「こころと言葉を育てる親の会」主催記念講演

於 弘前市立第二大成小学校

※本稿の講演録の掲載にあたっては、編集部の責任において、小見出しを付けて構成しました。

上原輝男先生のことば

※来年(2019年)5月に、新天皇の即位式と大嘗祭が行われるにあたり、『統感情教育論』の著書の中に、大嘗祭と日本人の生命実感について述べている文章がありますのでご紹介します。(編集部)

本年(1989年)は日本で、最高の神事が行われることになっていきます。新天皇の即位式と大嘗祭が行われるのです。日本の最高の祭と申すべきものです。このことに触れましたのは、日本人の存在感の根源と深くかわつてゐることだからです。

昭和が去り、平成の世となりましたから、新天皇が即位式を挙げられる。ここまでは、現代人にとりまして、その形を整えられるのだとしてうけとめられましょう。しかし、私たちの祖先の感覚では、その形の中味の方が大事であつたことになりました。それが大嘗祭という神事でありました。ですから、この神事をお済ましになられることによって、天皇の霊能がおつきになつたと思つて参りました。

現代人の考えでは、この話のうちの形式は認め、内容は信じられないということではないかと思ひます、そのくせ、形と心といずれが大切かと問われれば、大抵の人は心といひます。もし心が大切だとするならば、信仰の有無にかかわらず自分自身の生命実感そのものの働きの思ふべきです。

大嘗祭は、新天皇が神様に新穀をお供えにな

り、神様とともにお召し上がりになる神事だと伝えられていますが、私の最大関心事はその形式よりも、私ども祖先のそのことに托したその心情なのです。そのことが日本人の最高の神事たり得たのは、日本人の生命実感をそこに見たからといわねばなりません。

私ども子どもの時には、御飯をこぼすと目がつぶれるとまで言われて育てられるのが一般家庭の躰でありました。米(よね) 稲(いね)と呼ぶことの意味も、生命力のことを「よ」「い」の音で捉えているからで、その根元となるものとして「ね」を感じとつてゐるのです。そして、それを食べることによって、齢「よ」が生(延)えて節「よ」となり、「よはひ」(年令)が感じとられてゐるのです。世も代もこの「よ」の感覚を素地としてゐることに気づかねばなりません、世と代と合わせて世代という言葉がありますが、これなども生命感覚を共有し合つた時の空間意識だということがみごとに説明されましょう。

このような個人の意識を超えた遙かな遠い遠い記憶を辿ることによって、私どもは生命感覚が伝承されてゐることを知ります。

古いことが懐しく思われるのはこうした理由によるのだと思ひます。遠い近いは単に空間的距離の長短をいう言い換えではありません。記憶に刻み込まれた時間的新旧の加減によって遠近を区別してゐるとは限りません。遠いものほど生命感覚の伝承の深みに引き込まれて行くように思ひます。